

Title	企業成長と最適資本構成
Sub Title	
Author	藤本賢一(Fujimoto, Kenichi) 太田康信
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1989
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1989年度経営学 第718号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0718">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001989-0718</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 企業成長と最適資本構成

第1章では、複雑化、多様化する資金調達行動の変化と、それに伴う新しい資金調達理論の必要性を述べている。第2章では、これまでの資本構成理論の流れを代表的な論文の骨子を交えながら説明している。第3章では、本論文のテーマである最適資本構成論へのアプローチとして、独自に、資金調達ポテンシャルティを、借入れ余力と増資余力にキャッシュ・フローを加え運転資本を引いたものと定義し、同一総資産規模の企業においては、この調達ポテンシャルティの高い企業ほど倒産リスクは少なくなるものと考えた。また、借入れの利用には、総資産利益率を引き上げる効果があるが、過大なレバレッジは利子負担の上昇により、総資産規模の上昇に見合うだけの利益上昇を生み出さない。企業が財務リスクを一定に保ちながら成長を続けるには、資金調達ポテンシャルティを高く保ちながら、レバレッジ効果を最大に発揮できる資本構成を目標とすべきであるとした。第4章では、第3章で定義した、倒産リスク及びレバレッジ効果を上場企業を対象とし、大、中、小規模企業別に計算を試みた。その結果、倒産リスクを縦軸にとり、負債比率を横軸とした散布図では、小規模企業ほどU字カーブを描く関係が著しく表れ、大規模企業においては過大なレバレッジの利用においても倒産リスクをわずかに押し上げるのみであった。レバレッジ効果を縦軸、負債比率を横軸とした関係では、大、中、小規模企業を通じて逆U字の関係が観察でき、レバレッジ効果が上昇すると倒産リスクが減少する関係も見て取れた。これらの関係からレバレッジ効果を最大限に利用し、倒産リスクを最低限に保てる負債比率は65%の前後となることがわかった。結論では、企業の安定成長の為には、資金調達ポテンシャルティを每期一定以上に保ち、その上で調達コストを最小化する、資金調達手段と調達パターンを決定しなければならないとしている。また、そのためのアプローチとして、LPを利用したモデルの定式化を試みている。